

外山先生の思い出

市川茂子

令和二（二〇二〇）年八月七日の朝刊に、外山滋比古先生の訃報の記事が出た。

起き抜けに広げた紙面は、目を見張るような大きな活字の見出しになっている。まさに先生の偉業をたたえる追悼の言葉が書かれている。他紙はどうかと思つてコンビニに立寄つてみたら、文面は同じようでも一回り小さな活字の見出しになっていた。

先生は七月三十日に亡くなられて、告別式は近親者で済ませたとある。心の中でご冥福を祈りながら、お別れをした。

外山先生のご指導をいただいた経緯は、「展景」九十九号の編集後記に、主宰者の布宮慈子さんが書いてくれている。先生にお会い出来なくなつてからも、近くで見守つてくれているような思い

で、いつでもお会い出来るような気がしていた。

私が最後にお目にかかったのは、二〇一九年の一月、年明けてまもなくだったと思う。新聞の広告で、書下ろしのエッセイ集『忘れるが勝ち！』の刊行記念講演があるとのことで、すぐに申し込んでいて、お会い出来ることを楽しみに、お土産を持って出かけた。

その日は寒い夜にもかかわらず、八十名ぐらいの会場はいっぱいだった。先生は四、五日前から少し体調をくずしたと言いながらも、以前と変わりなく元気でお話しされたのがとてもうれしかった。講演終了後、著書にサインされているのを終るまで待つていて、松井さん（清紫会の代表）のご伝言を申し上げながら、ご挨拶出来たのだが、それが最後になってしまった。

先生が毎月、清紫会のお教室に来てご指導して下さっている頃は、私にとつて何よりの楽しい時間だった。勉強会を終えると、いつも三階からシビックホールの二十五階のレストランへと席を移した。夕暮れの空を眺めたり、夜の明りが点滅する頃の街の様子をのぞいたりして、先生を囲んでの食事はいつも海鮮丼だった。ドリンクバーの飲みもの代は先生が出して下さるなど、ごちそうになった。

時おり新聞に先生の著書の広告が出たりする。二〇一九年の十月二十七日には、新聞の一頁近くのスペースの中央に大きな写真が載った。書齋でループを使って読んでいるお姿と、脇の方の一枚は額から口もとまでの笑顔だけを写している。見出しには「人生一〇〇年時代を生きる」や

「未来 わからないから面白い」、「遺言は書きません。精いっぱいのことをして死ぬ時は死ぬ」とあった。記事の中で色々語られているお話は、もう何うことが出来ない。

三月頃からコロナ禍で集まる事が出来ない。清紫会を取り仕切って下さる松井さん、東京歌会担当の小野澤さん、展景の皆さんにお会い出来なくて残念です。

貴重な思い出を残して下さった、外山先生に感謝申し上げます。

無二の会短信

◆二カ月分ずつのカレンダーも、あと一枚になった。あわただしく過ぎてしまったような気分で、こんどは冬ごもりの仕度。テレビを見ながらの日々は、移りゆく自然の秋から冬へ向かう景色や、かつての旅行で見た所など、なつかしく思い出している。齢を重ねて、悲喜交々の去来する思いを抱きながら、ささやかに詠み続けてきた歌も、時には出来なくなってくる。この度は展景が百号の佳節となり、お世話をしてくださる方々に感謝申し上げます。
市川茂子

◆年齢から高齢者講習が求められ、そのあとに(運転)免許証の更新手続きがある。この講習の日時等はハガキで知らされた。内容には講義、適性検査のほか実車運転がある。ところでこのうちの実車にはそれぞれ懸念があり、前夜寝られなかったという(いわゆる)クラスメート(入院の大部屋並みの人数)になった小母さんもいたほどだ。数十年を軽のワゴン、それもマニュアル車しか運転してこなかったじぶんにも懸念があった。待っている日数分のストレスにもなっていた。事前の自動車学校(これが会場)への電話連絡(ここで、懸念を伝えておいた)で、実車車種がクラウン